

【研究・教育報告】

海外大学院推薦状を書く時のヒント： 海外大学院進学支援室の経験から

岡 部 篤 行

1. はじめに

約半世紀に渡る教員生活を振り返ってみたら、海外の大学にかなり多くの推薦状を書いてきたことに気が付いた。その中で、とても印象深かった経験が二つある。一つが、30歳代の時、20歳代後半に米国で指導をいただいた教員の昇進推薦状を書いたことである。米国の大学教員が熱心に学生指導する一つの動機になっているのであろう。もう一つは、50歳以降に欧米教員の卓越教授推薦状を何枚か書いたことである。昇任の評価は、所属大学内部や国内に留まらず、広く他国の大学の研究者による評価まで考慮するのには感心した。

60歳代に至り、地球社会共生学部の海外大学院進学支援室で活動をするこ
ととなった。それまでは、推薦状とはどうあるべきかをあまり深く考えもせず、
淡々と推薦状を書いてきた。しかし、支援室の活動となれば、推薦状とはどう
あるべきかを考える必要がある。まずは学生が受験する大学院が、推薦状にど
んな内容を要求しているのかを調べた。次に、海外の大学院で教えている教員
に、推薦状はどのように評価しているのかを伺った。さらに、ウェブ上に多く
掲載されている推薦状の書き方も調べた。しかし、地球社会共生学部の立場に
立った推薦状の書き方は、さすがに載ってはいなかった。そこで、支援室の一
員となってからの8年間、地球社会共生学部の学生の推薦状の書き方について
メモをとってきた。この報告書は、そのメモをもとにまとめたものである。
ただし、筆者一人の経験で、かつ米国、英国、オーストラリアの大学院への推
薦状に限られているので、あくまでも推薦状を書く際の一つのヒントとしてお

読みいただきたい。

2. 推薦状の重み

大学院が要求する推薦状の数は、国によって、また大学院によって異なる。標準的には、米国で2～3通、英国で1～2通である。例外的なのは、オーストラリアで、要求しない大学院が多く、要求してもせいぜい1通である。

推薦状を書くとなると、推薦状がどの程度の重みをもって評価されているのかが気になる。しかし、その重みを公表している大学院に出会ったことはない。推薦状の重みを推測するには、学生が提出する書類から、間接的に推測するしかない。提出する書類は、客観的に評価される書類と、主観的に評価される書類からなる。

客観的に評価される書類は、主にGPAなどの大学授業の成績点とIELTSなどの語学テストの成績点である。米国の大学院では、加えてGRE（大学院進学テスト）の成績点を要求するところもある。しかし、最近は減る傾向のように見える。客観的評価は数値で表せ、各大学院は最低基準を公表している。学生にはその基準を満たすのを目指してほしいが、満たさないと即不合格というわけではない。客観的評価と主観的評価の総合的評価によるからである。ただし、競争倍率が高い大学院は、評価者が多くの提出書類を読むのが大変なので、客観的評価を足切に使う場合があると聞いたことがある。

主観的評価は、主に学生のエッセイと推薦状とからなる。学生のエッセイ内容は、志望動機である。客観的評価や主観的評価以外に、オーソドックスな社会科学系の場合、例えば米国の政治科学大学院では、「サンプル」を要求する場合がある。「サンプル」とは、学生が書いた論文を意味する。「サンプル」の長さは大学院によって異なり、いわゆるランクの高い大学院では、長いもので5000ワーズというのがあった。この長さの「サンプル」は、卒業論文が願期日までに完成されていないと難しくなる。実際、間に合わなくて「サンプル」を要求する大学院をあきらめた例もあった。そのようなこともあるから、卒業論文を「サンプル」とするためには、遅くとも4年生の10月までに卒業論文を

ほぼ仕上げている必要がある。ゼミ教員には、それに合わせて学生を指導していただくのを希望する。

海外大学院進学を支援する業者の報告によると、客観的評価と主観的評価の割合は、50%、50%が標準だとのことである。しかし、筆者の経験からすると、もう少し主観的評価が高いような気がしないでもない。主観的評価では、学生の志望動機エッセイと推薦状の評価の重みが知りたくなる。ではあるが、これは公表されていない。おそらく3通を要求する大学院は、推薦状が主観的評価の半分ぐらいは占めているように思われる。それを示唆するようなこととして、過去に、推薦状がとても良いから確認の面接をしたい、と言われた学生がいた。また、筆者が書いた推薦内容を確認したいとのことで、電話でのインタビューを受けたこともあった。これらの事を考えると、教員の推薦状は、かなり重みがあると言えそうである。そうとなると、教員がいかに良い推薦状を書くかということが大きな課題となってくる。

3. 事前の準備

推薦者の立場に立つと、良い推薦状とは、合格を後押しするような推薦状となる。それを抽象的に一言でいうと、受験する大学院が求めている学生像に受験学生が適合しているという推薦状、ということになる。これに対応するには、推薦する教員は、学生の受験する大学院が求めている学生像を知っている必要がある。その学生像は、海外の大学院がホームページで、必ずと言ってよいほど公表している。例えば、オックスフォード大学院では、

For information on the nature of the course and the skills and experience it will require, follow the link to the course page in the notification email on the Oxford University website :

<https://www.ox.ac.uk/admissions/graduate/applying-to-oxford/information-for-referees#:~:text=We%20do%20require%20references%20to,and%20by%20the%20referee%20themselves> (2024年1月3日に確認)

で公開している。それによると、まず

We are looking for insights into the applicant's suitability for an academic course. Please try to focus your reference letter on the experience and skills that will be relevant to this.

と述べ、続いて、後述するように、かなり多くの項目に渡って言及してほしいことを述べている。これに対応するには、推薦する教員は、学生の受験する大学院が求めている学生像を知っている必要がある。

大学院が求める学生像は、同じ分野でも大学院によってかなり異なる。地球社会共生学部の学生は5校ぐらいの大学院を受験することが多いので、教員がそれぞれの大学院が期待する学生像を読みこむ必要があり、これには時間がかかる。その上、それを読んで大学院が求める学生像に対応して推薦状を書くと、さらに時間がかかる。地球社会共生学部教員は、通常の教育、研究、学務に忙しいから、どの大学院もほぼ同じような推薦状にしていまいたくないのであろう。しかし、どの大学院でも通用するような推薦状にすると、内容が抽象的になり、推薦状の迫力は落ちざるをえない。

この時間のかかる事前準備を短くするには、受験学生から各大学院が求めている学生像の情報をもらうことである。当然のことながら、学生は受験する大学院がどのような学生を求めているかの調査を行う必要がある。しかし、学生はそれをあまり行わず、いきなり学生に要求される志望動機エッセイを書くことが多い。そうするとエッセイも推薦状もピントが甘いものになりがちである。それを避けるためには、学生に受験する大学院ごとに、大学院が推薦者に要求する事項と、大学院が期待している学生像の情報をまとめてもらうのが良い。

4. 推薦状の第1段落

推薦状には名前を明記するので、評価者は、誰が推薦してきたかが分かる。

しかし、評価者が推薦者を知っていることは少ないであろう。そのような場合、評価者は、推薦人の書いていることが、信頼のおけることなのかどうか分りかねてしまう。そこで大学院は、推薦者に受験者と推薦者の関係を書くように明示していることが多い。しかし、そうでない場合もあるので、忘れずに書くのがよく、それも第1段落に書く方が、信頼をもって以下を読んでもらえるであろう。

大学院から第1に問われるのは、指導した期間である。もちろん長い方が信頼される可能性は高くなる。そのため、ゼミ教員の場合、単にゼミにいた期間だけでなく、受験者がゼミ教員の授業を受けた期間も入れるのが良いであろう。ゼミ教員でない場合、多くは学生が教員の授業を受けた期間となる。その授業外でも研究室に訪れることがあったら、その期間も入れるのも一案である。

推薦状を書く人は、日本の場合、ゼミ教員が圧倒的に多い。日本の文系で定着しているゼミ教育は、同じ教員が長期間にわたって教員のテーマで教育する日本独特な教育システムと言えよう。米英の大学院教育でも seminar はある。しかし、学期単位が普通で、同じ教員が2学期以上に渡って同じタイトルで担当するのは多くない。そのため「私の seminar に属していた」と書いても、長期間インテンシブに指導したと理解されるとは限らない。そこで、長期的に指導する seminar であると説明をつける必要がある。ついでながら、推薦状にリーダーシップの評価で、ゼミ長を務めたと書いてあることが多くあった。学生も自分のエッセイに、そう書くことが多くある。海外の教員は、ゼミ長になじみが少ないので、これも説明する必要があるであろう。

第2に推薦者によく要求されることは、推薦教員の経歴である。オックスフォード大学院の前述サイトの例を引用すると

State your own background and qualifications so we understand the basis of your assessment.

推薦者が教員である場合、教員の専門が学生の受験する学問分野であると、信頼性は上がるであろう。教員以外の職業を経験されてきた教員の場合は、その職業経験が学生の修士修了後に希望する職業に関係していることを言及すると、信頼性は上がるであろう。ただし、欧米の大学院の評価者が、地球社会共生学とは何かを知らないことが多いから、専門を地球社会共生学と書いても、評価者は分かりかねる。それを逆手にとると、地球社会共生学は広い分野を含むので、学生が受験する大学院の専門に柔軟に合わせて明示することが可能である。例えば、地理系の大学院を受験する場合は、専門は地理空間情報ですとか、国際関係論の大学院を受験する場合は、国連で地域紛争の調停に関わる仕事をしていました、と書くことができる。

さらに、推薦教員が受験大学院の教員と頻繁に研究交流していると、さらに信用度は上がるであろう。海外大学院との研究交流は自身の研究上も、また学生受験支援上も好ましい。

5. 大学院が推薦状に要求してくる項目

以上の導入部分を含めて、推薦状の長さは、大体500から1000ワーズで、A4で1枚から2枚となる。多くの大学院は、2枚以内に留めるように要求している。

海外大学院の教員から、学生の優れた点を抽象的に書いてある推薦状は、つかみどころがなく評価が難しい、と言われることがよくある。それを防ぐためか、オックスフォード大学院の前述サイトの例を引用すると、次のことを要求している。

You should write **in enough detail to give specific examples** of their qualities and achievements. (太字は筆者が記入)

これに対応するには、「□□さんは、○○については、とても良い」、と簡単に書くのでは不十分で、どのように良いのか具体的な例を挙げて書く必要があ

る。

要求してくる評価項目は、大学院によって異なる。例えば、オックスフォード大学院では、推薦者に言及して欲しいことを前述のウェブで公開しており、次の項目を挙げている。

Critical thinking

Independent and collaborative work

Ability to organise workload

Extra-curricular activities

Prizes awarded

Written and oral communication skills

トップにcritical thinkingが挙げられている。これはオックスフォード大学院のみならず、多くの大学院が挙げている項目である。この思考教育は旧来の日本ではあまり重視されてこなかったように思われる。Critical thinkingのためには、論理的な論争が必要であり、そのためにはlogical thinkingが必要となり、それには論理学が基礎となる。その論理学は、狭義の論理学と広義の論理学に分けることが出来よう。野矢（2014）によれば、前者は、主張するための論理演繹で、主に形式論理学で扱われ、大学の論理学の授業ではこれが多い。一方、後者の広義の論理学は、主張と主張の関係、あるいはある主張のまとまり全体と、その部分となる主張の関係で、主に自然語論理学で扱われている。この広義の論理学は、近年のAIによる自然言語処理で、急速に発展している分野である。しかし、現状の大学授業において自然語論理学やその演習は、取り上げられることが少ないように見受けられる。それを扱っている野矢（2014）の『論理トレーニング』は、数少ない演習書と言えよう。

Critical thinkingを日本語に翻訳すると批判的思考となる。その用語からしてか、学生に批判をしてくださいというと、欠点を挙げることで終わってしまうことが多い。欠点を挙げる事は必要であるけど、批判を踏まえて建設的な意

見を述べるのがcritical thinking本来の目的となる。推薦状で受験生のcritical thinking力について書く場合は、大学院はwrite in enough detail to give specific examplesを要求しているので、批判を踏まえて建設的な意見をだした具体的エピソードを添える必要があろう。

Critical thinkingのみならず、上に要求されている評価項目について、具体的な例で推薦状を書くには、ゼミ教員は、どうすれば良いであろうか。その一つの方法は、学生に卒業論文を書くように指導することである。願わくは学生の卒業論文を関連学会のポスターセッションで発表させることであろう。というのも、学会のポスターセッション発表は、誰もが認める客観的なエビデンスとなるからである。海外の大学院教員に聞いても、学部生の学会ポスター発表は、たいへんアピールする方法として効果的であると言っている。

課題は、どうすれば学生は学会ポスター発表ができるようになるかである。学生一人で仕上げることが出来れば、それはとても結構であり、過去に1例がある。それが難しい場合、ゼミ教員と共著で仕上げるのが一つの方法で、むしろその方が良いように思われる。なぜなら、進学する大学院の授業に関わることに、緻密な指導が出来る上に、推薦状でcollaborative workやability to organise workloadの項目で、具体的にアピールする内容を記述することができるからである。さらに、JASSOの奨学金応募では「研究業績」を書く必要があり、そこに学会ポスター発表を書くことができるからである。

以上の理由から、筆者は学生とゼミ教員に、卒業論文に関連する学会でポスター発表をするように勧めている。そうすると、学生のみならず教員からも、基礎学力がないのに無理ではないか、という答えが返ってくることが多い。確かに、学生に研究者の研究を求めるのは無理である。しかし、大学院を受験する学生の研究に求められているのは、研究者並みの研究ではなく、学生が日頃に経験している「小さな」事例で、例えば、青山学院周辺などの身近な地域で経験した事例などで、学生らしいアイデアを出す研究である。それは、ほどほどの基礎学力ででき、かつ学生でなければ出来ないことである。

Weinberg and Galenson (2019) の研究によると、独創性が発揮されるピーク

は人生で二回あり、最初のピークがアイディア型の20歳代半ば、次のピークが総合型の50歳代半ばと述べている。多くの教員は、最初のピークである20歳代を越えているので、若者ならでの新アイディアを出す可能性が学生にあるのを忘れてしまいがちである。だから、学生が新アイディアを出すのは無理だと言いたくなるのは理解できる。しかし、20歳代のピークを伸ばすことを考えて指導するのが良いのではないであろうか。過去に海外大学院に進んだ8人は、学会でポスター発表しており、学生らしい独創性は海外大学院から評価され、初年度から奨学金をもらった学生もいる。学生のポスターのタイトルは、この報告書の参考文献に挙げ、ポスター自体は海外大学院支援室の資料として保存してある。必要とあれば、参照されると参考になるであろう。

ゼミ教員でない教員が推薦状を書く場合は、上のような状況にはない。その場合、推薦状の題材探しは、教員の授業、演習、ワークショップなどが主になる。よくある推薦文に、「〇〇さんは、授業で良い質問を多くした」というのがある。もちろん、これ自体は良いけど、それだけだと海外大学院の教員からは、それは普通でしょう、とよく言われる。確かに、筆者が経験した大学院授業では、学生は、うるさいくらいよく質問をして自分の意見を述べていた。そんな状況であるから「〇〇さんは、授業で良い質問を多くした」だけではあまりアピールにならない。説得性を上げるには、大学院がwrite in enough detail to give specific examplesと要求しているので、どのような学生らしい質問をし、criticalな意見を述べたかを具体的に記述する必要がある。それには、

- ①学生が挙げた質問の具体的事例を書き、
 - ②それに対する学生が挙げた批判点を書き、
 - ③その批判点を、学生がどのように一歩改善しようと試みたか、
- を書くというのが理想的であろう。

そのようなことが書けるようになるためには、学生側の課題と教員側の課題がある。前者の課題は、学生が単なる分からない事柄の質問ではなく、学生らしくcriticalな質問をすることであろう。欧米の大学院授業に比べ、地球社会共生学部では、学生は教員の説明を聞くのが主で、criticalな質問する学生はまだ

まだ少ないのではないだろうか。

後者の課題は、学生がcriticalな質問をしやすい授業環境を教員がつくることであろう。知識を一方的に教えるのではなく、学生とのインターアクションを通して教えるというactive learning型授業が適していると思われる。その具体例として、筆者のエッセイ「測定・測量アクティブラーニングの試み 三角形の和は180度か?」(岡部 2018)をご参考までに挙げておく。社会科学系の多くの授業におけるactive learningの例は、公益社団法人私立大学情報教育協会が紹介している。

推薦状は、ついつい「過剰」に良く書くことが多くなってしまう。海外の教員に「完全無欠のような学生の推薦状が結構多いですね。実際に授業で学生に会ってみると、落差を感じることがあります」とよく言われた。これに対応するには、合格後から秋の進学時までの半年間、学生に推薦状に見合った実力をつけてもらうことである。筆者は、学生に学部に関連授業や、オンライン授業を受講してもらい、また試験問題に対応できる英語エッセイの書き方の指導をしてきた。幸い、学期が始まるまでにはレベルアップして、推薦状の内容にあまりたがわない学生を送り出すことができたと思う。その中には、海外大院修士を首席で修了した学生や、地球社会共生学部ではGPAが低かった学生が3.96(0.4尺度)を取る学生もいた。地球社会共生学部の学生は、大きな伸び代があり、頼もしい限りである。

6. おわりに

筆者が海外大学院に留学したのは、1972年であった。当時、海外大学院留学というのは稀なことで、羽田飛行場のロビーで研究室一同の万歳!の大声に送られ、悲壮感があった。あれから半世紀が経ち、グローバル時代となって、地球社会共生学部の学生が、全員、学部留学するようになったのは万感の思いである。とはいえ、海外大学院ともなると、進学するのは年に数名で、まだまだ少ないと言えよう。嬉しいことに、留学した学生は留学先で高く評価されており、大きく伸び代を伸ばしている。最近では、送り出した学生が、修了後、地

球レベルで活動するようになってきた。地球社会共生学部の実現しつつあるのではないだろうか。そのような学生を後押しする海外大学院の推薦状を書いていただくのを大いに期待している。

参考文献

- Weinberg, B.A. and Galenson, D.W. (2019) "Creative Careers: The Lifecycles of Nobel Laureates in Economics," *De Economist*, 167, 221-239.
- 岡部篤行 (2018) 「測定・測量アクティブ・ラーニングの試み 三角形の内角の和は本当に180度か？」『測量』 6月号 10-11。
- 野矢茂樹 (2014) 『論理トレーニング』産業図書。

以下、学生が第1著者である学会ポスターの題名

水谷勇貴 岡部篤行 森岡渉 「商業施設店舗数と時間・曜日ごとの『流動人口』『勤務地人口』『自宅人口』の関係」(取り上げた事例の対象地域は青山学院大学周辺)

山田和哉 政金裕太 岡部篤行 木村謙 「震災における高層建物教室の避難経路混雑度を推定するシミュレーション分析 ～事例：青山学院大学～」

平松賢 宇田川藍 岡部篤行 「投票率と居住者属性の関係：渋谷区議会議員選挙の事例」

森下直哉 村上広史 忽滑谷優里 「『Wi-Fi 人口統計データ』による青学生の行動分析 フェアトレードカフェの利用促進を目的として」(事例は青山キャンパス周辺)

政金裕太 佐藤佳穂 岡村吉泰 岡部篤行 木村謙 「震災時における避難経路の混雑箇所推定のためのシミュレーション 青山学院周辺を事例として」

石井あゆ美 桑島京子 「日本における多様な教育ニーズに即した『包摂的かつ公正で質の高い教育』の実現に向けた課題—神奈川県における外国につながる子どものノンフォーマルな学び場と学校教育との関係性の考察から—」

杉野若葉 Sugino, W. Business and Human Rights in Japan: Comparison of Human Rights Awareness and Environmental Awareness in the Generation Z's Apparel Consumption Pattern"

(原稿受理日：2024年10月18日)